# WPFN新聞

発行元
長崎平和のカンパ寄贈の旅
2025

# 平和のカンパ寄贈へ

8月18日から19日にかけて、中学1年生から高校2年生までの8人が「長崎平和カンパ寄贈の旅」に参加し、長崎を訪れました。組合員から寄せられた「平和のカンパ」を日本赤十字社長崎原爆病院に届けることを主な目的とし、原爆資料館や平和記念公園で被爆当時の長崎の状況や、平和の重要性について学びました。

WPFNの意味　World-Wide Peace From Nagasaki-Newspaper

## 「被爆地ナガサキ」で学ぶ

1日目は、被団協がノーベル平和賞を受賞した際の授賞式に立ち会った林田光弘さんにガイドしていただき、原爆資料館と浦上天主堂を見学しました。資料館では、被爆直後の街の様子や焼け焦げた衣服、生活用品などを目にし、当時の痛々しく悲惨な状況を身をもって知ることができました。その道中では崩れた建物の一部など街中に残る原爆遺構も見学しました。

2日目は、平和記念公園でピースバディの方にツアーをしていただきました。ピースバディという呼び方には、一方的に教えるだけではなく、参加者とともに考えながら学びを深める存在という意味があるそうです。平和の泉の形に込められた意味や、平和祈念像を建設する際の当時の市民の声を教えていただきました。午後からは、長崎原爆病院を訪れ平和のカンパを寄贈しました。院長からお話を伺い、実際にカンパがどのように活用されているのか教えていただきました。

（臼井和奏）

## 時を刻み終えた被爆時計

### 7万人の命と共に歩みを止めた

この夏、僕たちは長崎を訪れ、戦争について学ぶ機会を得ました。僕は原爆資料館で、爆心地の写真や原子爆弾がさく裂した瞬間で止まった時計を目にしたこと、被爆して亡くなった人々の遺品が展示を見ました。焼け焦げた制服、小さな靴、壊れた時計――それらは、ただの物ではなく、そこに確かに生きていた人々の人生の証でした。

その中でも、止まったままの時計が最も印象的でした。その針は、原子爆弾「ファットマン」が落とされた瞬間を指したまま動いていません。1945年8月9日11時2分時間で止まっています。原爆さく裂の一瞬の間に、何千人、何万人もの命、そして何万の家が壊滅させられ、失われたのだと思うと、僕は言葉を失うほど、とてもショックでした。この1945年8月9日11時2分で止まった時計は当時の惨状を伝える貴重なものです。僕は改めて原爆は恐ろしい兵器だと思い、原爆はもう廃絶したほうがいいと思いました。

（榊翔多）

## 終わらぬ放射線被害

### 消えることのない被爆の苦しみ

原爆資料館では、原爆が通常の爆弾と違うことは、大量の放射線を出すことだと知りました。原爆の放射線は人体を刺し貫き、そのときいろいろな細胞を破壊します。

原爆が投下されたときに出た放射線の他、爆発の燃え残りの「黒い灰」やこれが混じって雨となった「黒い雨」など残った放射線で被害にあった人もいます。

損傷の程度は被爆した放射線の量によって異なりますが、爆心地から1キロメートル以内で被爆した人のうち、被爆当時は無傷であってもその大多数の人が後に死亡しています。

放射線の破壊力はそれほど強烈で人体に及ぼす影響は爆発のときだけでは終わらず戦後80年たった今でもケロイド、白血病、がんなど被爆から時間が経過するにつれて発症する原爆病の要因となっていることを知りました。

原爆資料館で見た「あの夏に始まった放射線障害の苦しみは、死ぬまで消えることがない。」という言葉に被爆者の苦しみが伝わってくるようでした。長崎を最後の被爆地にするためにも被爆者の苦しみを受け止めて伝えていかなければならないと思いました。

（穴口聡実）

WPFN新聞

発行元

長崎平和のカンパ寄贈の旅
2025

# 生き残った一本柱鳥居

## 山王神社　二の鳥居に想う

私たちは、八月十八日、長崎にある山王神社の二の鳥居を見学しに行き、平和教育に取り組む林田さんにお話を聞きました。

この記事では、その鳥居を見て感じた原爆の威力の恐ろしさ、原爆投下時から現在まで残る二の鳥居の現状や歴史について紹介します。

山王神社の二の鳥居、別名「一本柱鳥居」を実際に見学し、私たちは原爆の熱風・熱線の恐ろしさを知りました。

一本柱鳥居とは、爆心地から八百メートルの距離にある、原爆投下時から現存する柱が一本の鳥居です。この鳥居は長崎の原爆で被爆し、爆風により片方の柱が吹き飛ばされ、柱が1本になりましたが、現在も奇跡的に倒れずに残っています。

実際に、吹き飛ばされた柱のあった場所からみて、笠木が爆風の威力で少し斜めに動いていました。また、もともと鳥居には文字が彫られていましたが、熱線の力で爆心地側の面が溶けて今は読めなくなっていました。爆心地から、約八百メートルの位置にあったにもかかわらず、石の鳥居を動かし溶かす爆風と熱線の威力に驚きました。

鳥居は、原爆のすさまじい破壊力を伝える遺構であり、その姿は原爆の悲惨さを現代に語り継ぐシンボルとして知られています。私たちは、一本柱鳥居から、原爆は放射線だけでなく爆風や熱線も恐ろしい威力を持っていることを知りました。

（寺尾大志・中江央）

# テニスボール１つ

## ７万人もの命が奪われた

長崎に落とされた原爆はプルトニウム239という放射線元素を使用する原子爆弾です。このプルトニウム原爆は、外周に配置された高性能火薬を同時に爆発させ、中心部にあるプルトニウムを均等かつ瞬間的に圧縮して超臨界状態に達することで、核分裂の連鎖反応を引き起こすインプロージョン方式というものです。

長崎原爆「ファットマン」はTNT火薬換算で22，000トン（22キロトン）相当の規模に上ります。この規模は、広島に投下されたウラン235の原爆の1．5倍の威力でした。英語で「Fat man」、太った男という意味があります。爆弾の形が幅広で丸い形状だったのでアメリカ合衆国によってそう名付けられました。使用されたプルトニウムはテニスボール1個分ほどの量で、7万人以上の命を奪ったという事実に強い衝撃を受けました。

爆心地では地面の温度が約3000度に達し、鉄が溶ける温度の倍以上の熱の中で人間がどうなってしまったのか考えるだけで恐ろしいと思いました。わずかな物質で都市全体が壊滅的な被害を受け、多くの生活や街の様子が一瞬で失われた現実を知り、戦争の恐ろしさと平和の尊さを改めて実感しました。原爆が落とされた瞬間、骨までを炭にし、皮膚を溶かして人々を苦しめ傷つけた、その恐ろしさを伝え続けることの重要性を深く感じました。

（長島蒼依）

# 回避不可　原爆の威力

原子爆弾は米軍にとっては勝利の象徴でしたが、日本にとっては死の象徴となりました。原爆による被害は、主に爆風・熱線・放射線の三つに分けられます。爆発直後の爆風はあらゆるものを押し倒しました。その威力は四肢がちぎれるほどの威力があったそうです。続いて熱線による火災が発生しました。熱線によるケロイドは身体的な痛みだけでなく、差別による心の痛みも伴いました。さらに追い打ちをかけるように放射線が人々を襲い、爆風と熱線から逃れた人を生涯にわたって苦しめました。

爆心地から2キロ以内は特に被害が深刻で、ここを境に被爆者と認定されました。たった1発の原爆で一瞬にして街を焼き尽くすので、核兵器の爆発からは逃げることができず、爆心地から2キロ以内は建物が全壊、2．5キロでは修復不可能、3キロまでは部分的に破壊されました。爆心地から約1キロ圏内の遮蔽物のない場所では致死率が100％でした。

このような被害をもたらした原爆の威力はトラック5200台分のトリニトルエン爆弾に相当し、鉄を溶かす1500℃の2倍以上の高温が市街地を襲いました。石も沸騰するほどでした。爆発によってできた火球は数百万℃に達し、まるで第二の太陽のようでした。死傷者は広島より少ないですが、爆発の威力の視点から考えると広島よりも大きな被害をもたらしました。

（喜多方颯大）

# 浦上天主堂被爆から再建

平和学習のフィールドワークでは浦上天主堂に行きました。

長崎は貿易港であったこともあり、キリスト教のカトリック信者が多くいました。

しかし、江戸時代にキリスト教が禁止され、信者かどうかを見分ける方法として行われました。それが「絵踏み」でした。それが行われた場所が今の浦上天主堂です。

キリスト教信者たちは神に謝罪の意を込めてその地に浦上天主堂を建てました。信者の一人ひとりがレンガを買って20年にわたって建設しました。しかし原爆によってわずか30年で倒壊し、当時付近にいたカトリック信者1万2千人のうち8千人もの人々が命を落としました。

浦上天主堂は教会、お祈りの場であるため、被爆遺産として残さず再建されました。中には被爆したマリア像が置かれています。

（喜多方颯大）

WPFN新聞

発行元

長崎平和のカンパ寄贈の旅
2025

# 防空壕に残された生活

## 空襲警報　過去の音ではない

爆心地から100メートルの場所に位置する場所には、当時の防空壕が平和公園に残されています。たくさんの物語が存在し、そこで亡くなった多くの方や、1人生き残った小学生の少女についての話を、長崎市で平和活動を行うピースバディの方にお聞きすることが出来ました。爆心地付近の悲惨さを目で見て体感しました。

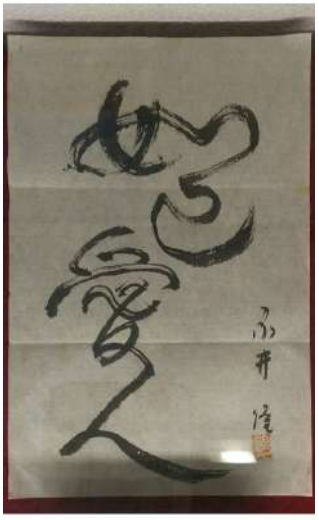
平和公園近くの防空壕を訪れ、暗く湿った子どもがしゃがまないと入れない小さい防空壕の中で、いつ爆弾が落ちてくるかわからない恐怖を想像しました。「戦争の記憶は防空壕の記憶」という言葉が心に残りました。防空壕の中には食器やビール瓶などがそのままになっていて、一瞬にして日常が失われたことが伝わりました。

ピースバディの方から、防空壕の前で空襲警報の音を聞かせてもらいました。私たちはそれを昔の戦時中の空襲警報の音だと思ってしまいましたが、実際に現在ウクライナで使われている空襲警報でした。戦後80年を迎えた日本では、戦争の記憶が薄れつつあり、過去の音だと錯覚すること自体が平和であることの証拠とも言えるかもしれません。同時に自分が平和について深く考えられていないことを痛感しました。今も危険にさらされている人々がいる現実を忘れず、平和の中で暮らす私たちこそが、その事実を伝えていく責任があると感じました。

また、松山町では原爆で生き残ったのは小学生の女の子1人だけだったと聞き、私たちは改めて原爆の恐ろしさを実感しました。

（榊翔多・穴口聡実・臼井和奏）

## 愛の力で平和を



皆さんは永井隆博士のことを知っていますか？

長崎で被爆しながらも、医学研究と執筆活動を続けた永井隆博士は、生涯をかけて平和の尊さを訴え続けた人物です。重傷を負いながらも人々の救助を9日間にわたって行い、その後病床に伏せました。この時から博士は本の執筆をはじめ本を通し、平和を訴え続けました。亡くなるまでの6年間で17冊もの著作を刊行しました。博士は聖書の一節である「己の如く隣人を愛せよ」から命名したわずか2畳半の如己堂にて「平和を」と書した色紙を千枚以上、世界各国に贈りました。

博士は著書『いとし子よ』の中で「本当の平和をもたらすのは、ややこしい会議や思想ではなく、ごく単純な愛の力による」と記しています。憎しみではなく愛の力こそが平和を生むと考えた姿勢は、私を含め多くの人々に感銘を与えたと思います。

長崎原爆病院の谷口院長も「尊敬する偉大な先輩」と博士をたたえられました。博士のその人柄と思想は今も受け継がれています。

（石陽翔・臼井和奏）

## NO MORE 原爆

平和記念像とは長崎市に建立された青銅製の彫刻で、犠牲者の冥福と世界平和を折念するモニュメントです。

平和祈念像の建設は1951年（昭和26年）に開始され、1955年（昭和30年）8月8日に完成しました。平和祈念像は筋骨隆々な上半身裸の男性がモチーフです。モチーフに関して賛否両論があり、戦争をイメージさせてしまうのでは？といった意見もありました。この像の費用は本体に約3千万円掛かり、台座に約2千万円、合計で約5千万円掛かりました。原爆投下後10年足らずで建造されたわけですが、被爆者からはそのお金でまず被爆者に対する支援を充実させてほしかったという意見もありました。

この像は長崎の団体が建てたとも言っていました。

右手は空を指しており、原爆の意味があります。左手は平和を表しています。平和の象徴だと、ピースバディの渡邊さんが言っていました。この像は目を閉じています。目を閉じている理由は、犠牲者の冥福を祈っているとも言っていました。長崎には広島のように平和のシンボルがないため、平和祈念像を建造したとのことです。

「長崎を最後の被爆地に」という思いが込められ、この像は手を挙げています。手を挙げている理由は、上から落ちてきている原爆の脅威のことを表しているということを、言っていました。

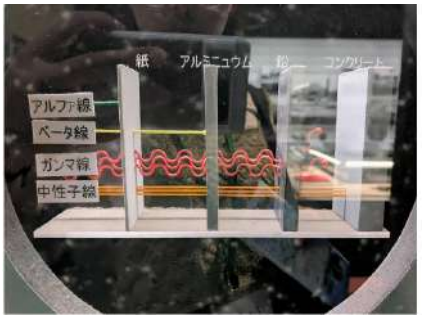
（寺尾大志・石陽翔・喜多方颯大）

## 被爆分類に「胎児」も

長崎原爆について学ぶ中で、私たちは日本赤十字社長崎原爆病院の院長に被爆者の分類について教りました。

被爆者とは、「被爆者健康手帳」を所持している方を指します。被爆者には4つの種類が存在し、「直接被爆者」、「爆心地周辺に後から入った「入市従事者」、「死体処理救護者」などがいる中で、私は「胎児」という存在に驚きました。

「胎児」とはつまり、被爆者の胎内にいたことで放射線の影響を受けた人々も、被爆者として認定されているということです。




被爆者の胎児は、自分も被爆者になるだけでなく、流産や死産、障害が残ることも多く、原爆の放射線の影響は、まだこの世に生まれていなかった命の未来をも歪めました。

被爆の形は一人ひとり異なりますが、その背景には見えない苦しみと記憶があると考えさせられました。

（中江央）

# WPFN新聞

## 生き残った人々

発行元
長崎平和のカンパ寄贈の旅2025

## 差別や罪悪感に苦しんだ

戦後８０年経った今も、原爆で受けた心身の傷は被爆者に残り続けています。見た目での差別や自分だけ生き残った苦しみ、目の前で家族や街の人々が犠牲になる悲惨な光景を目にしたことで深いトラウマを抱える人も多いと知りました。助けを求められても救いたいのに救えない苦しみを経験した人もいました。さらに爆風や火災で街のインフラや住宅が壊れ、生活の基盤は完全に失われました。そして生活は苦しく窮迫しました。

生き残った人々は戦後様々な苦しみに悩まされました。

１つ目は差別です。「自分にも放射線がうつって病気になるかもしれない」という、根拠のない噂が広がり、被爆者は就職や結婚の場面で不利になりました。ケロイド（やけどの痕）が残った人々は、見た目の違いから差別や偏見にさらされました。ピースバディの林田さんは「人間はあることに対して知識を持っていない状態、無知であるから差別をするのだ。」とおっしゃっていました。

２つ目は自分だけ生き残ってしまったというという罪悪感です。生き残れて嬉しい反面、身近な人が大勢亡くなり自分だけが生きていることを喜べなかったと聞きました。また逃げているときに多くの人に助けを求められたが助けることが出来ず、今でも後悔している人もいると聞きました。

８０年たった今も被爆者を苦しめ続ける原爆が早く無くなってほしいと心から思いました。（長島蒼依）

空壕や時間が止まった時計は、過去のつらいことを語りかけてくる。忘れないでと。僕はこの経験を生かして平和を守る1人になりたいと思います。

（榊翔多）

## 長崎で学んだこと①

### 「長崎の人の想いが聞けてよかった」

旅に参加して実際の資料や施設などを見て言葉だけでは伝わらない当時の状況や平和であることの大切さを肌で感じることが出来ました。また、今回初めて出会った子と楽しみながら学ぶことが出来て仲良くなれて良かったです。

（臼井和奏）

長崎の原爆について学ぶ機会が少なかったので、今回の旅を通して学べてよかった。改めて原爆の悲惨さを痛感し、2度と戦争はしてはならないと同時に平和な世の中を作るべく、自分から発信していきたいと思った。（喜多方颯大）

実際に被爆を経験した人は数十年後にはいなくなることに危機感を抱き、これからは私たちの世代が戦争の記憶を継承していかなければならないと思いました。（穴口聡実）

今、僕達は平和な暮らしをしている。でも、この防

## 長崎で学んだこと②

### 「原爆の威力悲惨さ忘れない」

この旅に行って、いろんな経験をしました。その一つは、長崎原爆資料館へ行ったことです。あと一つは、長崎の町を見たことです。長崎に行けてよかったです。（寺尾大志）

僕はこの長崎に行く体験を通して、戦争の悲惨さ平和の大切さを学びました。ためになる話や経験が多く、とてもいい旅になりました。ツアーを通していろんな人と話した経験により、結束力や団結力を生むことができ「戦争は絶対にしてはいけない」未来に伝えていけたらと思います。

（石陽翔）

学んだ中で、その破壊力が想像以上に甚大である衝撃を受け、被爆者がその後に受けた差別や偏見など、原爆の被害は身体的な痛みだけでないことを実感し、被爆者が感じた痛みに寄り添う心を持ちたいと思いました。（中江央）

戦争の悲惨さを知り、普段の平和が当たり前でないと感じました。被爆された方々が減少している中で私は日々の出来事を大切に周りの人への感謝を忘れずに、平和を大事にして後世に平和の大切さを伝えて生きていきたいです。

（長島蒼依）